



国民の森林・国有林

中部森林管理局

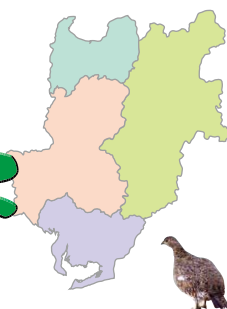
〒380-8575長野市大字栗田715-5

☎050-3160-6513

<http://rinya.maff.go.jp/chubu/>

広報

中部の森林



カヤの平自然休養林で資材のカラマツを運搬する高校生(北信署)

貴重な自然を守ろう！ ～高校生と歩道整備～

主な項目	○ 高山植物等保護対策協議会総会	P 2
	○ 各地からのたより	P 4
	○ 寄稿「森林鉄道の源」	P 8
	○ シリーズ「森林官からの便り」	P 8
	○ シリーズ「ご当地自慢」	P 10

第五十三回 高山植物等 保護対策協議会総会

【保全課】七月十六日、中部森林管理局大会議室において「第五十三回高山植物等保護対策協議会（高植協）理事会及び総会を開催しました。「高植協」は、長野県内の国有林並びに民有林における高山植物等の保護と地域内の美化を図り、将来にわたり国民の福祉に寄与することを目的としています。

総会では、副会長の環境省長野自然環境事務所長をはじめ、長野県、警察本部、教育委員会等行政機関、山岳・観光関係団体、五地区協議会長等計二十九名が出席し、平成二十五年度事業報告及び平成二十六年度事業計画等を提案し審議しました。



総会の様子

事業報告全体では、保護指導に従事した延べ人員が「九、四九八人」で、ほぼ前年度と同数となり、保護取締件数が一、三、五九件と対前年度比九四^{パーセント}と減少したことが報告されました。

これは、各地区における指導員など関係者による継続的なパトロール活動の効果と考えています。

先駆的な取組事例として、「中信地区協議会」が、上高地で台湾、韓国等海外からの観光客が増加傾向であるため、外国人向けに山のマナーを四ヶ国語（日本語、英語、中国語、韓国語）で記載した「トレイディングカード」を作成し、グリーンサポータースタッフ等により配布を行った例が発表されました。

現場の指導員からも「トレイディングカードの要望がある。」といった声も挙げられ、今後、海外からの登山者への対応やマナーを守ってもらう取組が共通した課題となりました。

平成二十六年度事業計画では、「信州山の日」（七月第四日曜日）が制定され、「信州山の月間」が七月十五日～八月十四日までの間に設定されたことに合わせ、夏の入込者が多い期間にパトロール強化週間を設定することが、総会で承認されました。

また、行政機関の取組として、環境省長野自然環境事務所からは「国立公園における野生生物の保護管理等について」、長野県からは「長野県版レッドリスト改

訂の概要と注目される種」、中部森林管理局からは「ニホンジカの被害状況と対策」が発表されました。

豊かな森林資源の循環利用に向け

第一回愛知県木材安定供給協議会

【名古屋事務所】八月二十日、愛知県林業会館において、第一回愛知県木材安定供給協議会が開催されました。この協議会は、利用期を迎えた豊かな森林資源の循環利用に向け、需要者ニーズに対応した計画的・安定的な木材供給により、県内の林業及び木材産業の活性化並びにこれらを通じた森林の整備の促進を図ることを目的に新たに設置したものです。



協議会の様子

これまでの関係機関でこうした情報交換の場はありましたが、今回、協議会を

設置し、活動を始めることとなりました。

会長には愛知県森林組合連合会から石田敬一専務理事を選出し、事務局を愛知県森林組合連合会に置き、構成員には中部森林管理局名古屋事務所、愛知県森林管理事務所、愛知県、愛知県木材組合連合会、愛知県木材市場連盟、愛知県森林組合連合会、森林総合研究所、愛知県木材チップ協会等で構成されています。

近年の中部圏周辺の森林・林業を取り巻く木材利用の流れは、富山県・長野県・岐阜県・愛知県・三重県などにおけるバイオマス発電の動き、岐阜県・静岡県などでは大型の製材工場や合板工場で大きな動きが見られます。

今回の協議会設立により、これまで以上に情報交換できる関係を構築し、A・D材まで全ての木材の安定供給、県産材（特にあいち認証材）の普及・定着、木材の安定供給体制の構築に必要な情報の収集・提供などについて連携強化し、森林・林業・林産業の活性化や森林整備の促進となるよう取組を行っていくこととしています。

なお、協議会では、各構成員からの情報提供の他に愛知県半田市において現在建設中の国内最大級のバイオマス発電所の事業概要等について、実施主体の住友商事子会社のサミットエナジー担当者より説明を受け、その情報共有を行いました。

教職員を対象とした

森林・林業体験学習会

「木曽森林ふれあい推進センター」八月七日、木曽・上伊那地域の教職員を対象とした「森林・林業体験学習会」を、木曽森林管理署管内の赤沢自然休養林ほかで実施しました。

この学習会は、小・中学校の教職員の森林・林業についての理解を深め、森林環境教育の重要性やその知識を高めてもらうことを目的に、長野県と共催により平成十四年度から実施しているもので、今回で十三回目の開催となります。

当日は、木曽地域の教職員八名が参加されました。



赤沢自然休養林で学ぶ皆さん

午前中は、職員による案内で、赤沢自然休養林内を散策する中で、木曽地域の森林・林業の歴史や赤沢自然休養林の

生い立ち、並びに林業遺産である木曽森林鉄道の説明に耳を傾け、実際に樹齢約三五〇年にもなる木曽ヒノキやサワラなどの木曽五木を観察し、それぞれの樹種の見分け方や特徴を学びました。

午後からは、休養林近くの小川入国有林六四ほ林小班で、教職員自ら獣害（クマ）被害防止テープ巻きの作業を体験しました。



テープ巻き作業体験の様子

各人がそれぞれ防止テープ、カッターを手にして、樹齢三〇年近い人工林ヒノキのクマ被害防止テープ巻きに汗をかきました。この体験を通し、「林業と獣害の関係を知り勉強になった。」との声も聞かれました。

続いて、焼酎貯木場及び上松町にある製材工場を見学し、天然林と人工林の価格の違いや材の使い道など木材の流通や



製材工場で木材を学ぶ先生

加工の流れを学びました。

参加した先生からは「地元の森林の歴史や林業を知ることができ、大変有意義であった。学校でも森林に関する授業があるので、学んだことを他の先生や生徒に還元したい。」などの感想が多く寄せられました。

今回は、先生の方の参加でしたが、来年度は、児童・生徒も参加できるようPRを工夫し計画していきたいと考えています。

四〇〇年の歴史を熱く対談

「名古屋事務所」八月十九日、名古屋事務所へ宮木哲也熱田区長が来訪され、山元康則名古屋事務所長と対談されました。

この対談は、熱田区の更なる発展のために熱田区内に所在する行政など関係機関が定期的に参集して協議を行っている

「三水会」の場において、熱田の歴史文化の魅力を積極的に発信する取組を進めている宮木区長が、地域との連携を強め木材利用の促進や都市住民を森林・山村地域へ誘導することにより地域振興に資する取組を進めている名古屋事務所の業務に大変関心をもち、このたび対談が実現したものです。



対談の様子

この日は宮木区長のほか、園部裕美まちづくり推進室長、武内学係長も同行され、対談の後、林業の歴史と木材利用の展示コーナーを視察されました。

対談では、山元所長から中部森林管理局の概要と、日本の木材産業発祥の地とされる熱田地区四〇〇年の歴史について「堀川」開削から飛騨・木曽川における木材の流送、白鳥（貯木場）の始まりから「太夫堀」など現在では一部の面影を残すのみとなった名古屋事務所周辺の様子について説明しました。



(旧) 白鳥貯木場の歴史を説明する山元所長

宮木区長からは、「以前、名古屋市宮織部局に勤務していたとき、本丸御殿の復元にも携わったが、当時木曾ヒノキなど資材の確保に大変苦労した。」ことや、「熱田区では、熱田ブランド戦略に取り組んでおり、熱田神宮など熱田区が受け継いだ地域の歴史や文化を発見し発信することにより活力ある魅力の溢れるまちにしていきたい。」との発言がありました。

展示室の視察では、「木曾式伐木運材図会」解説コーナーを熱心に視察され、昭和三年当時の木曾川上流部から木材を流送するため、修羅、白、堰、といった運材設備を用いた作業の記録動画も視聴されたほか、実際に動く森林鉄道や架線集材のジオラマにも大変興味を示されました。

視察の最後に記念撮影をし、名古屋事務所で作成した「熱田白鳥地区四〇〇年の歴史」パネルを山元所長から贈呈したところ宮木区長からは「周辺には白鳥庭園など名勝地があるが、この事務所には近寄り難く感じていた。地域の人たちにあまり知られていないのはもったいない。歴史を伝えることが重要、今後も連携していきたい。いただいたパネルは区



宮木熱田区長(左)へパネルを贈呈

また、当日は森林鉄道のジオラマを展示コーナーに提供していただいた中津川市在住の伊藤定夫さんがジオラマの調整のため来所されており、制作時の苦労話などについてもお話しいただきました。

木材利用のコーナーでは近年の様々な木材加工技術に驚かれるとともに「今の木材価格は？自給率は上がっていますか？」といった質問もありました。

役所で展示等活用させていただきます。」と感謝のお言葉をいただきました。山元所長からも「事務所の職員も少なくなつたが地域の皆様に情報発信してまいりたい。」と応じました。

各地からのたより

高校生による

カヤの平自然休養林の歩道整備

【北信署】八月十一日、長野県下高井郡木島平村にあるカヤの平自然休養林において、地元の下高井農林高等学校の生徒による歩道整備を北信州森林組合の協力のもと実施しました。

今回で二年目となるこの取組は、歩道整備を行いながら地元にあるカヤの平高原の豊かな自然環境について学ぶことや、国有林や森林組合を身近に感じてもらい今後の進路の参考にしてもらうと



階段作りの様子



杭打ちを行う生徒たち

計画したもので、緑地工学コースの三年生一一名が作業にあたりました。

歩道整備の内容は、丸太を使った階段作りですが、階段用の資材はカヤの平自然休養林の近隣で当署発注の間伐事業を受注している北信州森林組合が、現地のカラマツ材小径木を準備しました。

作業は、集合場所からカラマツ資材や作業道具等を約四〇分かけて現地まで担いで運搬することから始まりましたが、慣れない担ぎ上げで「もう疲れた。」との声も聞こえ、何とか現地までたどり着くことができました。

現地到着後、階段作りに取りかかり、三班に分かれた生徒達は当署職員及び森林組合職員の指導の下、資材の杭を打ち込み、打ち込んだ杭に横木を組み合わせて針金で固定し、整地するまでの一連の

作業を行いました。これまで学んできた現地実習の経験も活かし互いに協力しながら、二時間ほどの間に十二段ほどの階段ができました。

カヤの平自然休養林は、ブナ林が有名で多くの観光客が訪れます。今回の作業は「産・官・学」が連携して地域に貢献するとともに、若い世代の方々に地元 of 自然環境や森林・林業について知ってもらう機会にもなることから、今後も継続して取り組んでいきたいと考えています。

双六池周辺の環境保全活動

【飛騨署】 当署では、平成十八年度から北アルプス双六池周辺の環境保全活動を継続的に行っています。

双六池は双六岳と梶沢岳の鞍部にあり、池の周りにはハクサンイチゲ、チンゲルマ、ヨツバシオガマ等のお花畑が広がっていて、笠ヶ岳が遠望できます。多彩な魅力を備えた山域ですが、双六池周辺は、植生の後退や山から流れ込む雪解け水、雨水によって浸食された土砂の流入を招いています。

登山者や山小屋関係者からの強い要望によってはじめた環境保全活動は、人々による素掘の側溝と沈砂池の作設、土のうとヤシネットを使用した土留工の作設など試行錯誤を繰り返しています。高山地帯という厳しい環境にあることか

ら、強風や凍結などによって土のう、ヤシネットの劣化が著しいことや沈砂池が満砂状態となったことから二年ぶりに双六池周辺の環境保全活動を実施したものです。

環境保全活動は、九月二日～三日の二日間、当署職員七名、環境省平湯自然保護官、双六小屋関係者によって実施しました。二日早朝に出発した一行は、現地まで片道六時間の道のりを踏破して午後一時半に現地到着、登山の疲れを見せることなく、早速、作業に取りかかりました。

作業の内容は、沈砂地に堆積した土砂の土のう袋詰めと運搬、土のう袋による土留工作設（ヤシネット（二列×二十五列）で土のうを巻き込む）と流路工作設です。少人数での作業となりましたが、環境に配慮した効果的かつ効率的な工法



土留工(50m×2列)を施工

について意見を交わしながら作業を進めました。

今年の夏は天気が安定せず、飛騨地域は記録的な大雨による被害を受けました。そんな中、心配された天気でしたが、双六小屋の主人曰く「今年一番の天気」に恵まれたこともあり、作業は手際よく進められ予定した作業は全て完了しました。作業をやり遂げた職員は一緒に、その達成感と北アルプスの環境保全活動の一助を担えた満足感に浸っていました。



作業を終えた皆さん(後方は双六池)

今後も、当該エリアにおける浸食の状況や効果等を経過観察しながら、環境保全活動を進めていきます。

木曽ヒノキ備林見学

モニターツアーを開催

【東濃署】 七月十八日、中津川市内に拠点を置く報道機関四社を対象に、木曽ヒノキ備林見学モニターツアーを開催しました。

この企画は、新聞記者の皆さんに、裏木曽の深山を自身の目で確かめ、さらに、この地域の木の文化を継承し歴史的な木造建築物等を支える森を育てる「裏木曽古事の森」の取組を理解し、報道に活かしてもらうために、中津川市、裏木曽古事の森育成協議会とともに東濃森林管理署が実施したものです。

当日は、青山節児中津川市長から「木曽ヒノキなどの温帯性針葉樹がまとまっている山々は世界的にも貴重です。記者の皆さんは、中津川市の宝物であるこの備林をよく知り、大いに発信してください」



御用材伐採跡地での説明

い。」と挨拶いただき、裏木曾国有林のシンボルとなっている「二代目大ヒノキ」、平成十七年に行われた伊勢神宮式年遷宮の「御用材伐採式会場」、深緑に映える「高樽の滝」、協議会の活動の場である「裏木曾古事の森」などを巡りました。



高樽の滝を望む昼食会場

要所では、大野森林技術指導官、安田首席西股森林官はじめ署員が、引き伸ばしてラミネートした初代大ヒノキや式典の写真を紙芝居風に説明したり、トチノキの太木を見上げて深呼吸してもらうなど、日頃からの工夫を活かしてご案内にあたり、一行には、樹齢三〇〇年を超える裏木曾ならではの自然を満喫し、人間の力が及ばない自然の力や時間の流れを感じていただけたようでした。

後日、モニターツアーに参加されたC紙の地方欄コラムにおいて、豊かな自然に触れ歴史を学ぶ優れた場として木曾ヒノキ備林が紹介されました。こうした声は、今秋開催予定の木曾ヒノキ備林見学会「ご神木の里で木曾ヒノキの歴史と文化を語ろまいか」(主催…裏木曾古事の



二代目大ヒノキの前で参加された皆さん

森有成協議会、共催…東濃署)などに活かしていくこととしています。

大阿原湿原にて 高校生と歩道整備

【南信署】八月十八日、黒河内国有林内にある大阿原湿原において上伊那農業高等学校緑地創造科二年生三十二名の参加を得て、歩道の整備等を実施しました。

この取組は平成十六年より始まり、平成二十四年度からは(一社)林業土木協会天竜支部に加盟している建設会社等の皆さんから、ボランティアによる技術指導を受け実施しているものです。

当日は、生徒を三班に分け、古くなった杭の交換や排水部分の改修などを中心として作業を行いました。ボランティアとして参加してくださった林業土木協会の方々からは、杭の打ち方、見栄えが良く

綺麗なロープの張り方など、より実践的で細かい部分まで気を配った指導が行われました。作業中の高校生同士も意見を交わしながら、次第に細かい部分までこだわり良い出来栄になりました。



杭打ちの技術指導を受ける高校生

最後に高校生から「杭打ちやロープの張り替えなど、単純な作業でも勉強になる部分がたくさんあった。小さいところまでこだわってやることの大切さが分かった。」といった感想の発表があり、実際に現場で働く林業土木協会・当署職員との作業は、貴重な経験となったようでした。

今回の作業によって大阿原湿原の歩道は、より整備が行き届き、湿原の景観を楽しんだり、リフレッシュする場として多くの観光客の方々に足を運んでもらえればと思います。



高校生からの感想発表の様子

また、今後も湿原の整備を通して、地元高校への国有林PR、高校生の技術習得機会の確保を図っていきたいと思います。

恵那農高校生が森林管理を学ぶ 間伐体験と

木曾ヒノキ備林見学・学習

【東濃署】岐阜県の「森と木と水の環境教育支援事業(緑と水の子ども会議)」の一環として、恵那農業高等学校、県恵那農林事務所、東濃森林管理署の三者が連携して、高校生の間伐体験と木曾ヒノキ備林見学・学習を実施しましたので取組を紹介します。

八月七日、岐阜県立恵那農業高等学校環境科学科の三年生七名が、森林管理の一つである「間伐」について学び、中津



指導を受ける生徒

川市阿木国有林内で、映画「WOOD JOB!」の伐倒指導をした恵南森林組合の小倉さん、藤岡さんの手ほどきを受けました。

生徒たちは、間伐の目的、チェーンソーの使い方、安全な伐倒作業の方法等について説明を受け、伐倒のデモンストレーションを見学した後、二班に分かれ、全員がチェーンソーを使って間伐作業を体験しました。立木の伐倒は初めてという生徒たちでしたが、伐倒方向を確認し受け口を作り、水平を意識して追い口を入れ、ソルを切りすぎないように慎重に作業を進めました。伐倒木が傾き予想した方向に倒れたヒノキを見て、自分で倒したことに感動し大満足の様子でした。生徒たちは、「間伐のやり方を分かりやすく教えていただきました。学んだことを生かし、学校林の間伐したい。」「倒したい方向を正確に決めることが難しかった。

た。でも、とてもやりがいがある仕事と思いました。』と感想を話していました。

また、八月十八日には、同校の二年生三名が、「日本三大美林の一つである木曽ヒノキの天然生林を見学し、森林生態や森林管理、植生について学ぶ」をテーマに、裏木曽国有林を訪れました。



ヒノキとサワラの違いを学ぶ

最初に、木曽ヒノキ備林の成立過程や森林管理について学習し、次いで、第六十二回式年遷宮の裏木曽御用材伐採跡地と二代目大ヒノキ、ヒノキとサワラが上下に合体している「合体木」を見学し、「木曽ヒノキ備林の歴史や成立過程を知って、森林に興味を持った。」「太く、樹高が高い木が沢山あり三〇〇年生以上の樹木に生命力を感じた。」と感想



合体木の説明を受ける生徒たち

を話していました。

今回の体験を通じて、生徒たちが地域の森林や林業に興味を持ち、将来、森林・林業・木材産業に関連した職業に就いてもらえることを願いました。

なお、岐阜県の「森と木と水的环境教育支援事業（緑と水の子ども会議）」は平成二十四年度から導入された「清流の国ぎふ森林・環境税」を活用して行われています。

土岐市に「治山工事」及び

「官行造林」の写真パネルを贈呈

【東濃署】八月二十九日、土岐市役所において、「土岐地区はげ山復旧治山工事」及び「官行造林」に関する写真パネル十一枚を、東濃森林管理署長から土岐市長へ贈呈しました。



贈呈した木製写真パネルの一部

古くから焼き物（美濃焼）の産地として発展してきたこの地域は、陶土の採掘や森林の伐採によって昭和初期には「日本三大はげ山」の一つに数えられるほど森林の荒廃が拡大していました。

このため、昭和七年から四十五年にかけて、土岐市を中心とした一、五七六鈔において、国の直轄治山工事として「土岐地区はげ山復旧治山工事」が施工され、当時最新の土木技術と約一七五万人の労力が投入されました。

また、大正十五年から昭和三十年代にかけて、国が土地所有者と六〇年程度の契約を結び民有地の森林造成を代行する「官行造林」が行われ、契約面積は延べ五七六鈔に及びました。

これらの結果、今では着実に森林が再生し、同治山工事は、県や市の取組とともに「後世に伝えるべき治山」全国六〇選の一つに選定され、また、官行造林地は、本年、四六鈔が土岐市有林に引き継がれたのを最後に全ての契約が満了して無事にその役割を果たしました。

東濃署では、こうした地域の森林再生

この写真パネルは、かつてのはげ山に緑が甦り市民の憩いの場となっている「陶史の森」で九月六日に開催されたイベントで紹介された後、同森内の「ネイ



イベントで展示した写真パネルの説明

の歴史を風化させることなく次代に引き継いでほしいという願いを込めて、アカマツを植栽する様子などを記録した当時の写真や資料を引き伸ばして東濃ひのき製の額に納めたパネルを作成し、土岐市に贈呈することにしたものです。

当日は、間島署長から林野庁が実施してきた治山工事及び官行造林の経過について説明し、加藤土岐市長からは、「貴重な資料をいただき大変ありがたい。国等の事業が当地域の復旧に貢献してきた歴史を広く市民に紹介していきたい。」と感謝の言葉をいただきました。

チャーセンター」で常設展示されています。

寄稿

かつて木曾ヒノキや天然広葉樹を運材し、地域住民に愛され続けてきた森林鉄道に関する思い出や楽しい出来事などを、OBの皆様から寄稿いただきました。

国有林の歴史を示す貴重な財産として、ここに掲載させていただきます。

森林鉄道の源

元長野局福利厚生課 高倉 章氏

一九四九年（昭和二十四年）上松町小川の谷間から軽便（森林鉄道を走る汽車）が煙をなびかせながら伐木を牽いて走ってくる。

これを木曾川の対岸から見ていると車輪の大きな音が聞こえてきた。戦後間もない昭和二十四年に赤沢伐採事業所へ配属となり、毎日赤沢の山の中を動き回っていた。今の赤沢自然休養林内である、この山から伐り出されてゆく伐木は最盛期には一輦二〇石（約五立方メートル）積載で一日に一六輦約九〇〜一〇〇立方メートルになる。材木の長さは、一五尺に伐り揃えられ、ひのき、ひば、さわら材が夕暮れになると作業軌道を下ってきて赤沢の停車場へ到着する。

それをガソリン機関車が入れ換え整理し、列車編成をして一日が終わる。

翌日、上松運輸営林署の蒸気機関車が受け取りに来て、最大八輦編成で上松町へ向かって下って行く。この時、制動手も乗務して速度調節をしていたが時代とともにエアブレーキに切り替わっていった。この状態は五月から十一月まで続き、十二月に入ると山は休眠状態へと移行してゆく。

当時伐採現場は、中立沢の奥地で起伏の多い林内を五料の作業軌道で結ぶ、栈橋も多い順勾配で八キロ軌条（レール）が敷設されていた。

この軌道を木伐積載車は数台連結して動力無しで自走するのである。軌道は自走を容易にするよう設計布設してあるため勾配を利用して台車の制動装置の調節のみで走行していたのが森林鉄道の源を成す姿であった。

やがて十年が過ぎ旧田立村の滝の近くの現場に赴任すると森林鉄道の先にインクライン運伐の場所に出会った。傾斜一五度以上の急斜地を台車に材木数本を積み込み吊り降ろすのである。約五〇メートルの急斜面に軌条を敷設しその上をワイヤーロープで胴締めをした伐木を台車毎に下降させる。見ていると身震いするような軋みで伐木はレールの上を下って行く。中間部分にさしかかると、復線になっていて空車と行き交うようになっていた。



川上国有林ブナ原生木

国有林の多くは、ブナ、ナラ等の天然林が八九割を占め、特に夜叉ヶ池周辺は、国内希少野生動植物種のヤシヤゲンゴロウや日本海側特有のブナ林等の原生

林が八九割を占め、特に夜叉ヶ池周辺は、国内希少野生動植物種のヤシヤゲンゴロウや日本海側特有のブナ林等の原生

「森林官からの便り」

岐阜署 揖斐森林事務所

揖斐森林事務所は、福井県との県境に接した岐阜西濃地域に位置し、中部森林管理局管内では、最も西にあたり本巣市・揖斐川町に所在する八団地、面積九、九六二ヘクタール、官行造林面積は、揖斐川町ほか六団地一四三ヘクタールを管轄しています。

当時坂下営林署管内には田立のほか神坂にも川上にもインクライン運伐が残されていた。

以上のような半世紀前の森林鉄道に繋がる山奥の状況は忘れ去られようとしているが、今に思うと森林鉄道の源は作業軌道に端を発していたことが懐かしい。

シリーズ

「森林官からの便り」



林が見られることから『能郷白山ブナ植物群落保護林』や『越美山地緑の回廊』として七・二六〇ヘクタールが指定されています。

こうした野生動植物の生息や生育環境が保全されている中で登山や自然観察などが行われ、また、七月には、雨乞い伝説の「三三五^キノミ



夜叉ヶ池登山の様子

登山道入口には、福井森林管理署と連携し入林カウンターを設け、入林者数を調査していますが、今年は、昨年に比べ天候が悪い日が多く、入林者数は、少し少ないようです。

一方、檜原谷国有林は、ニホンジカ・イノシシ等野生動物の増加に伴い、造林

木の被害が多発、今年度から有害鳥獣捕獲を職員で実行しています。

くくりわな・箱わなを使い、有資格者である非常勤職員が主体となつてわなを仕掛けるのですが、わなのかけ方・捕獲の仕方、獣道等の足跡を探りながらの作業はとても勉強になります。



捕獲されたニホンジカ

また、日本一の貯水量を誇る徳山ダムの北側に位置する門入国有林は、徳山湖を渡航しないと行けない場所で、独立行政法人水資源機構所有の船舶及び公用車を借り、先日、署長他四名の職員で調査に出かけました。併用林道を進む途中、集落が見え、そこには夏場だけ住んでいる方が自給自足で暮らしていました。

車両と徒歩で何とか国有林の入口まで行くことが出来ましたが、一日の行程ではここで引き返すのがやっとでした。



門入国有林遠景



徳山ダム湖と(独)水資源機構の船舶

この揖斐川森林計画区は、今年度から第四次地域管理経営計画が始まり、山地災害防止・自然環境の維持・保全等の主

たる事業の他、特に分収育林・官行造林の契約満期に伴い、伐採・更新・保育等が計画どおり進むよう署・関係機関・地域住民と連携しながら進めていきたいと考えています。

また、来年の秋には『全国育樹祭』が揖斐川町で開かれることが決まっております、これを機に一層、森林・林業の再生及び普及啓発に努めていきたいと考えています。

人のうごき

中部森林管理局人事

八月三十一日付

▽退職（木曽署数原森林事務所行政専門員）
古畑 光雄
九月十二日付

▽休職（木曽署森林技術員）

（平成二十六年十一月三十日まで）

牛丸 政治

行事・会議等の予定

◎第二回森林管理署長等会議

10月6日～7日 中部局

◎国有林モニター会議（現地見学会）

10月8日 南信署管内

◎架線系作業システム現地検討会

10月28日～30日 岐阜署管内

◎造林事業現地検討会

10月29日～30日 北信署管内



◆平瀬温泉郷

白川村平瀬は世界遺産白川郷荻町地区から南へ十二^{キロメートル}、霊峰白山の岐阜県側玄関口として古くからその名を馳せてきました。また、白山から湧き出る豊富な温泉は麓の平瀬地区まで引湯され、宿十軒と日帰り温泉施設を擁する平瀬温泉郷として親しまれています。



平瀬温泉郷

◆白水の滝

泉質は含イオウナトリウム塩化物泉で美肌効果が高いことから古来より「子宝の湯」と呼ばれ人気を集めています。

平瀬温泉から白山平瀬登山道口へ至る道は、溪谷を横切り、ブナやナラの巨木の間を縫うように走るまさに大自然のテーマパーク。白山の噴火で流れ出た溶岩流が複雑で切り立った地形を形成し、

溶岩台地の上に豊富な樹木を育んできました。



幻の名瀑「白水の滝」

豊富な樹木は豊かな水を提供し、溶岩台地の絶壁から落差七六^{メートル}、幅八^{メートル}の「白水の滝」がまるで一筋の絹糸のように流れ落ちていきます。

かつて那智、華厳と並び日本三名瀑に数えられていましたが、一九六三年に完成した大臼川ダムにより上流で取水されることになり、春から秋の観光シーズンのみ取水口の放流により姿を現す運命になりました。このため日本の滝百選にも選出されていない「幻の名瀑」と呼ばれています。

◆白山ブナの森キャンプ場

ブナやナラの巨木に囲まれた白山ブナの森キャンプ場は、日本でも屈指の原生林のまっただ中に存在する希有なキャンプ場です。何百年もの森の歴史を黙して語りかけてくる森の巨人たち



白山ブナの森キャンプ場

は、ここを訪れる人々に深い感銘と自然への畏敬の念を植え付けてくれることでしょう。また、キャンプ場では様々な自然体験プログラムを味わうことができ、その貴重な立地とともに人気も上昇中です。

◆白水湖

一九六三年に完成した大臼川ダムは、名瀑を儚く幻にしましたが、新たに神秘的な白水湖を生むことになりました。総貯水量一、四〇〇万トン誇るロックフィル式ダムは湖底にいくつも温泉の源泉が湧き出ていることから、その成分により湖面がエメラルド色に輝き、深い緑の原生林の中で宝石のような美しさを輝かせています。

白水湖は白山登山道平瀬道の出発点、急な登山道から時折見える湖面は、天候や場所によって様々な色や表情で微笑み、つらい急登の疲れをしばし癒やしてくれる女神のような存在です。また、湖



エメラルド色に輝く白水湖

畔には秘湯マニアの間では有名な絶景を誇る温泉露天風呂「大臼川温泉」があり、登山客の疲れを癒やすことはもちろん、白水湖を訪れる人々の心のオアシスになっています。

さらに、このダムの上流には、手取層群と呼ばれる中生代ジュラ紀から白亜紀にかけての地層が露出しており、多くの化石や恐竜の足跡が発掘されている学術的にも大変貴重な区域があります。



手取層群の貝の化石

◆アクセス方法

- ・濃飛バス 高山濃飛バスセンターから平瀬温泉 約一時間二〇分
- ・自家用車 東海北陸自動車道から平瀬温泉へ 白川郷ICより南へ約二〇分 荘川ICより北へ約三〇分 平瀬温泉から大臼川へ 県道白山公園線で約四〇分

◆お問い合わせ

白川郷観光協会
電話〇五七六九一六―一〇一三